

A



円覚 340号(正月号) 令和4年12月1日
編集発行 円覚寺派宗務本所
〒247-0062 鎌倉市山ノ内 409
TEL : 0467-22-0478
FAX : 0467-23-3027

円覚寺ホームページ



<https://www.engakuji.or.jp/>

慈悲の風を



令和五年を迎えました。健やかにご越年のこととお慶び申し上げます。

また喪中の皆様にはお見舞い申し上げます。

四年前には、平成の時代が終わりを告げ、新しい天皇陛下が御即位遊ばされ、令和の時代に期待を抱いたのでした。ところが、令和二年からというもの、新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、世の中は大きく変わりました。

当初は戸惑うことばかりでしたが、ようやく感染症にも慣れて、落ち着いてきました。これからの新しい時代の幕開けかと思っています。

新年にあたって、「慈風」と揮毫しました。あまり見慣れない言葉ですが、円覚寺の開山 山仏光国師の語録に見える言葉です。

仏光国師のことを称えて「時時授道し、処処度生し、慧日を中天に掲げ、慈風を大地に扇ぐ」と書かれています。

仏光国師の徳を称賛して、国師はいつも正しい道を授けてくださり、どこにあっても人々を導いてくださり、更に智慧の光をこの大空に掲げて、慈悲の風を大地に吹かせるというのであります。

智慧と慈悲とは仏教で最も大切にしている教えであります。仏光国師は、智慧においても優れておられ、慈悲においても実に濃やかに、そして深いものがございました。

閉塞感の強かったこの三年間でしたが、これから慈悲の風を吹き起こしたいものだと思います。

お釈迦さまがあるとき舍衛城にいらっしやうたときに、次のような喩えで慈悲の心の大切さを説かれました。

「比丘たちよ、たとえば、ここに、鍛えに鍛

えられたひと振りの刀があるとします。そこに一人の者がやって来て、「今わたしがこの刀の刃を、船のようにまげ、ねじりあわせてご覧にいきます」と言ったとするがよい。ところでいったい、彼にそのようなことができるであろうか」

お釈迦さまにそのように問われた弟子たちは、「そのようなことは、できるはずがありません」と答えました。

そこでお釈迦さまは、この喩えを用いて慈悲の心を説かれました。

「比丘たちよ、それと同じように、もし、なんじらが、慈悲の心を修め、それをたびたび繰り返して、すっかり身につけてしまつたならば、それを土台として立ち、そこに安住することを得て、もはや、なにもものも恐れることなきにいたるであろう。たとい鬼



神があらわれて、なんじらの心をかき乱そうと思っても、決して思うようにすることはできないであろう」

大乘仏教では、生きとし生けるものは皆生まれながらに仏の心を持っていると説いています。そしてその仏の心というのは、慈悲の心にほかなりません。誰しもが生まれながらに、命あるものを慈しみ、思いやる心を持っていると説いているのです。

中国の古典『孟子』には、「惻隱の情」ということが説かれています。

今かりに突然幼児が井戸に落ちようとするのを見たならば、誰でも人は、深く哀れむ心持ちが起こつてすぐさま助けようとしまします。それは子供を救つてその両親と親しくしようとか、人に褒めてもらおうという利害得失を考えたのではなく、自然と反射的

に行うのです。そしてこの惻隱の情こそが、「仁」という儒教において最高の徳とされる思いやりの心の萌芽なのだということです。そのように人は、他人を慈しみ憐れむ心を本来持っていると言われているのです。

仏教も同じように慈悲の心を本来誰でも持っていると言っていますが、これは決してなまやさしいものではないということです。鍛えに鍛える必要があるとお釈迦さまがお示しくださっているのです。

慈悲の心の土台となるものは、人間誰しも具わっています。わが子は、誰にとっても愛しいものですし、わが親は誰もが大切に思えます。身内の不幸に潸然と涙を流します。

しかしながら、慈悲の心を向けるのはたんに身内だけではないのです。広く人間に、

さらには生きとし生けるものにまで及ぼすものなのです。この慈悲の心が発露されないからこそ、世の争いは絶えないと思うのであります。

では慈悲の心は、どのように養い鍛えるのでしょうか。このことを学ぶことのできる、お釈迦さまの逸話がごさいます。コーサラ国のパセナーデイ王とマツリカー王妃の話です。

ある日のこと、パセナーデイ王は、この王妃とともに、城の高樓にのぼって、眼下に広がるコーサラの山野を見渡していました。

そのとき、王は、ふと王妃をかえりみて、問いました。「この広い世の中に、あなたは、自分自身よりも愛しいと思うものがあるなら



うか」と。王妃はしばらく考えて答えました。「王さま、わたくしには、この世に、自分よりも愛しいと思われるものはございませんと。」

王もまた「わたしにも、そうしか思えない」と言って、二人の考えは一致しました。しかし、普段からお釈迦さまの教えを聞いて

しい存在なのです。そのことを思いやっ
て人傷つけないようにしようというので
あります。

これがお釈迦さまの「不害」の教えであ
り、「不殺生」という仏教の根本精神となっ
ています。

慈悲の心を養うには、まず自己が愛おし
いと知ることです。この命はかけがえのな
い尊いものであることを知ることです。こ
の生命がお互いに宿るには両親はもとより、
そのご先祖、更にさかのばれば、長い三十八
億年とも言われる生命の歴史があります。
その営々とつながる生命をいただいている
のです。更に現在においても、日の光、大地、
空気、水、毎日の食べ物、着る物、履く靴に
到るまで数え切れない多くのものの関わり
合いの中に生かされています。

ていたので、この考えは間違っていないか
どうか心配になり、二人でお釈迦さまを訪
ねました。

お釈迦さまは、この世に自分自身よりも
愛しいと思うものはないという、王と王妃
の考えを聴いて次の偈を説かれました。

「人のおもいは、いずこへもゆくことが
できる。されど、いずこへ赴こうとも、人は、
おのれより愛しいものを見いだすことはで
きぬ。それと同じく、他の人々にも、自己は
この上もなく愛しい。されば、おのれの愛し
いことを知るものは、他のものを書しては
ならぬ」というのであります。

ここで学ぶべきことは、まず人は誰しも
自分を愛おしいと思っていることです。そ
のことをしっかり認めたくえで、それと同
じように、誰しも自分自身はこの上なく愛

今日命あることのなんと有り難いことか
という感激を持つことです。そして、その尊
い命をあの人、この人も、鳥や獣に到るま
でみんな持っているのです。だから決して
傷つけてはならないと思うのです。

しかし現実には自分さえ良ければという
思いや、目先の欲望や、些細なことから起こ
る怒りや憎しみの心に遮られて、慈悲の心
が顕わにならないのです。

まず自己の命を慈しみましょう。そして
身近な人にもその思いを広げましょう。さ
らにもっと広げてゆきましょう。その慈悲
を妨げる利己主義に気がついたならば離れ
るように努力しましょう。そのようにして
慈悲の心を養い鍛えてゆくのであります。

慈悲の風があまねく吹き渡る世の中にな
るように願ってやみません。